日中友好新聞　京都府連版

第３２７号

日中友好協会京都府連合会

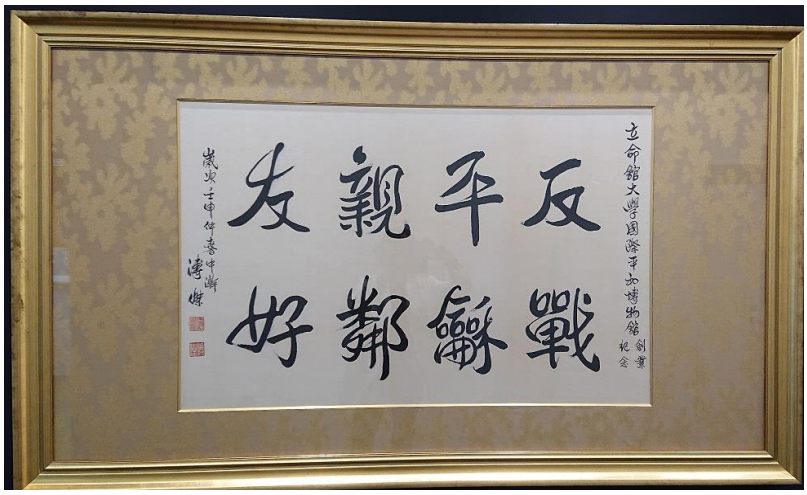
〒602-8026 京都市上京区新町通丸太町上ル　機関紙会館ビル３０２号

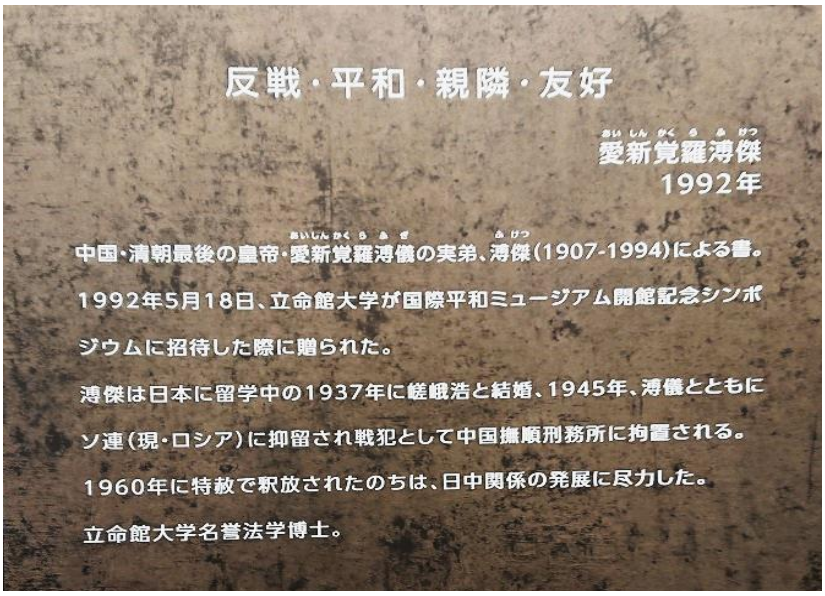
TEL＆FAX　075-256-2764　http://www.nichukyoto.gr.jp　info@nichukyoto.gr.jp

嵐山「日中不再戦」碑前集会が開催されました

九月十六日、嵐山の「日中不再戦」碑前で十五年戦争を振り返り、不戦の決意を新たにする碑前集会が今年も開催されました。

開会にあたり宇野木洋会長があいさつの言葉を述べました。宇野木さんは盧溝橋事件の起きた七月七日から、関東軍によって柳条湖事件が起こされた九月十八日の期間を、協会を上げて不再戦月間として取り組む意義に触れた後、京都の戦争展の会場でもある国際平和ミュージアムがリニューアル・オープンしたことを紹介。特に中国との関係ではラスト・エンペラー溥儀の弟・溥傑が揮毫した「反戦 平和 親隣 友好」の扁額が掲げられ、日中の政治的関係が厳しい中で両国の平和と友好を望む平和ミュージアムの姿勢が示されたことは非常に大きな意味があると述べました。





清水寺から駆けつけていただいた大西英玄師は大西良慶和上の三人の孫（英玄、晧久、晶允）の一人で、碑前集会で講話を述べられるのは今回が初めてです。三人に森清範管主の子息の森清顕師を加えた四人で寺を切り盛りしていますと自己紹介をされたのち、得意の英語会話能力を生かして、仏教者として平和のための国際会議などに参加して活躍している様子を、ユーモアを交えて語られました。

（二ページ目につづく）

若いころ碑建立のための寄付集めに奔走した穀田恵二さんは「日本共産党百年史」が出版されたことに触れて、戦前の非合法時代に共産党が侵略戦争反対の旗を掲げ、多くの若い党員がそのために戦ったことを具体的に紹介しました。また、穀田さんから「私が後を託す人」と紹介された堀川朗子さんは、福岡県出身の自身が家族から語り伝えられた、中国、朝鮮の炭鉱夫の悲惨な様子を振り返り、日中不再戦のために活動をしている人々をリスペクトするとともに、若者として国際的な平和活動に携わっていくという決意を述べました。

そのあと、留学生を含めて数名の参会者がそれぞれ味わい深いスピーチを行いました。初秋とはいえ、実際にはまだ真夏のような蒸し暑さの残る中、不再戦碑の周辺の木陰も利用しながら三十人近い参会者が最後まで集会を見守りました。

その後、会場を「花の家」に移して午餐会が行われました。参加者は十八人。中川陽子さんの乾杯の音頭で特製お弁当を頂きながら、ひとあたり自己紹介をし、それぞれコロナ禍で途絶えがちだった往来の再開を喜び、あるいは久闊を叙するなどして、思い思いに歓談しました。

（斎藤　敏康）

碑前集会後の懇親会

碑前集会の後、「花の家」で行われた懇親会には十八人の方が参加され、食事をとりながら自己紹介を含めて和やかによもやま話に花が咲きました。

以下に皆さんの自己紹介の中からいくつかの発言を簡単に紹介します。聞き間違いがあるかもしれませんがご容赦ください。（橋本）

◎会員歴は大変古いです、中国旅行の時に今の事務局長を説得して日中に入会させました。今は労演の公演が面白いので皆さんに勧めています。

◎今回初めて参加しました。もっと運動系の人の集会かと思っていましたがとても和やかな会で参加してよかったです。宇治市会で無所属の議員をしていますが日中宇治支部にも参加してこれからも勉強してゆきたいです。

◎大学一年生の時、サークル活動で日中と平和委員会のどちらに入ろうか迷った挙句、結局平和委員会に入りました。しかしその後文革の時、不再戦碑建立の時などに大きくかかわり思い出が深いです。

◎百歳に近くなって外出しにくくなっていますが、この集会には今後もできるだけ参加したいと思っているのでよろしく。

◎碑が建立された一九六八年はちょうど結婚したてのころで経済的に苦しくカンパもあまりできなかったのが心苦しく残っています。一九七〇年から常任理事を務め、昨年引退させてもらいましたが、今後もできる限り支えてゆきたい。

◎東映で役者を六十三年間続け、夜は呑み屋をやっています。亡き事務局長の粟田さんに勧められて日中に入り，会員歴は長いが会費を払うだけの会員です。

◎なんでも簡単に引き受ける癖があり、日中に入れ、常任理事になれ、立命の労組の仕事をせよと言われ、次々と言われるままに受けてきて、これからは”NO!”と言える人間になろうと決意したところなのですが日中のホームページを作れと言われてまたもや引き受けてしまい後悔しています。これからは”NO!”といえる人間になることを決意表明します。

『経済』の読書会しました！

二〇二三年八月二十六日(土)14：00～16：00、京都府連事務所で、『経済』No.336（二〇二三年九月号）特集「経済大国・中国の実像」の読書会が開催されました。誌上討論に参加された井手啓二氏をはじめ、七名が出席しました。

この特集は、井手啓二（長崎大学・立命館大学名誉教授）、梶谷懐（神戸大学教授）、山本恒人（大阪経済大学名誉教授）、及川淳子（中央大学教授）による「習近平政権と中国」と題する誌上討論と、中川涼司（立命館大学教授）「米中経済関係の行方」、近藤信一（岩手県立大学准教授）「中国のIC・半導体産業の現状と課題」、大場陽次（鉄鋼産業研究会）「世界最大の鉄鋼基地、中国の課題と展望」、阿古智子（東京大学教授）「習近平政権の統治手法と世論の反応」の各稿からなり、二〇一三年に発足してから三期目を迎えた習近平政権と中国の今後について議論や論稿が展開されています。

読書会は、井手氏を中心に進められました。主に①社会主義市場経済の第二段階、②中国経済崩壊論、③習近平政権と民主化、④米中関係・米中分断などについて意見が出ました。①については、井手氏の「市場経済の未発達と市場経済への社会的規制の未発達の並立」という中国的特徴にかんする議論に関心が集まりました。②については、最近の恒大集団の米国での破産申請や若年層の高失業率などからもいっそう不安視される中国経済について、井手氏はイアン・ブレマー氏や最近の『日本経済新聞』の悲観的論調を批判しつつクルーグマン氏を引き合いに

出して投資から消費への構造転換の可能性を強調しました。③については中国での習近平人気とその一方での権威のなさについてのお話や、経済発展やエリート層の海外経験から長い時間はかかるが民主化していかざるをえないとのお話に関心が集まりました。④については、あれだけの「貿易戦争」にもかかわらず、貿易関係や投資、サプライチェーンの構造には大きな変化はないことから、日本や日本企業は分断の論調に振り回されずに主体的に対峙すべきとの意見が出ました。ビジネスなど実際の日常においてもアメリカ人よりも中国人とのかかわりの方が多いとの意見も出ました。

出席者の経験談などを交えたざっくばらんな、アットホームな雰囲気の読書会でした。十月刊行予定の『研究 中国』における、今回の議論にも関連する丸川知雄氏（東京大学教授）や駒形哲哉氏（慶応義塾大学教授）の論稿についての予告もあり、またこのような読書会が開催されることを期待しています。

（横井　和彦）

（編集担当より）

①府連版「わたしと中国」始まります♪

みなさんの中国にまつわる思い出を教えてください。府連事務所までメールやファックスでお送りください。府連版に掲載します。写真も大歓迎！

②八月二九日～九月三日、恒例の「きりえ展」が開催されました。その詳細は次号で！

《中国伝統劇つれづれ》第五回

「滬劇」

藤野 真子

租界にせよ近未来的なビル群にせよ、街の相貌を見るにつけ「伝統」との縁遠さを感じてしまう上海。とはいえ、この街にも「伝統劇」はある。「地元の方言で歌唱とともに演じる劇」という定義に基づけば、滬劇(こげき)がそれに相当する。

どの地方劇も同様だが、滬劇を観るならやはり上海語を解する方がいい。筆者も決して「できる」水準にはないが、留学前の上海語事前学習はいくらか役に立った。ハイブリッド言語の上海語には、蘇州や寧波など呉方言圏各地の言語的要素が混在している。たとえば多くの上海人は一人称複数を寧波語由来の「阿拉」と言うが、滬劇では若い女性役でもそれより古めかしい「我伲」を使っていた。そもそもセリフ全般が、何かをパチンと弾くような一般的な上海語とは異なり、やや粘り気のある音節が繋がって、よりゆったりとしたものとして聞こえてくる。

中国伝統劇の中では大衆的な部類に属する滬劇だが、やはり舞台言語は別個に確立しているのだと感じた。

留学で多くの舞台を観るまで、滬劇といえば『羅漢銭』（一九五二）のような現代物しか演じないのだと思っていた。あながち間違いではないのだが、実際は清末の風俗や事件を描いたもの、民国期を舞台に学生の恋愛や花柳界を描いたもの、そして一九四九年以降の新社会や制度を描いたものと、題材はバリエーションに富んでいる。大衆演劇と朝ドラが併存しているような、とでも言えばいいだろうか。そういえば留学中、『母親的情懐』という演目を観た。発展めざましい現代の上海を舞台に、子どもの難病、夫の病没、そして自身はレイオフに遭う女性の苦難を描いた物語だった。個人的に、ありがちな人情ものだなぁという印象だったが、この劇はまたたく間に評判となり、気がつくと北京公演まで果たしていた。確かに、内容はベタだが作劇はしっかりしていた記憶がある。

逸夫（天蟾）舞台のような格式高い劇場での公演もあるが、多くは大世界の隣にある共舞台をはじめ、中規模以下の劇場で演じられる。江南人にある容姿なのか、筆者は地元観客に紛れて座っていても外国人とはバレなかった。隣に座る男性客に「主役のコイツ、劇団から独立してんけど、うまく行かんと出戻ってきたんやで……あー、下手になってへん？」と語りかけられたかと思うと、後ろから背中を突かれ「これ食べや。前に回して」と果物の入った袋を肩越しに渡される。こうしたカジュアルな上演空間でのコミュニケーションも、滬劇を観る楽しみの一つである。（ふじの　なおこ　関西学院大学教授）

『母親的情懐』
（出典『上海滬劇志』1999）

第四十九回学習・交流会の報告

九月二十一日（木）三人の参加でしたが、久保亨「社会主義への挑戦」（岩波新書）をテキストとして例会をもちました。反右派闘争、中ソの亀裂の拡大、中国の対日講和からの排除などなど、中国にとって困難な時代であったことがわかりました。しかしこの時期の出来事には世界情勢とも関連して複雑で理解できない事柄も多く、まだまだ学ばねばならないと思わされたことでした。

次回は十月十九日(木)十三時三十分から、テキストの百ページから読み進めます。わからないこと続出ですが、単純にわかったことにしないのがこの学習会の特徴です。どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

（橋本）

≪時の焦点≫

鹿さんたちの訴えはなぜ届かないのだろうか

戦時中、大江山に強制連行された中国の人たちの裁判はつとに終結しているが、裁判に参加しなかった被害者と家族が新たに加害企業の中国支社に対して賠償を求めて提訴した件は一向に進展がない。裁判所は受理した訴状を何年も棚ざらしにして審理に入らない。それだけでなく、そもそもいったん受理した訴状を何の説明もなく突き返してしまう。こうしたことを目の当たりにすると陳腐な連想ではあるが、やはり中国における人権のあり方が疑われてしまう。

少し迂遠なようだが中華人民共和国という国の成り立ちを考えてみよう。共産党政権は孫文を国父として尊重している。孫文の辛亥革命が国民国家への出発点だからである。孫文の三民主義である「民族・民権・民生」は、少数民族の満州族からなる清朝に対する多数漢民族の国民的覚醒をめざすものだった。だから「人々は平等」だとは言ってもそれは漢民族が一族として平等だという認識であって、「個人の自由」すなわち個人の生命、財産、尊厳ではなく民族総体の自由のための民権であり、民生であるということだ。逆に言えば民族総体の自由のためならば個人の自由への干渉も許容されるのである。孫文のこの「個を孕まない」民権、民主は中国の伝統的な思考として現在の中国共産党の統治のなかにも深く根づいていると思われる。

筆者は宗教や思想に関わる自由は重要な人格的自由だと考えているので、ウイグルでのことや劉暁波の最期が念頭を去ることはないのだが、裁判を受ける権利が侵害されることは、政府の政策によって子供は一人という法律が作られ、個人として生きる権利が侵害されることとむしろ類似的だとも考える。中国の民法では中華民族が民族として生存し、発展を遂げることが「最重要の基本的人権」であるとする。人権は個人の権利である前に国家や民族という単位で考えられるべき権利なのだ。

例えば日本政府との間に無用な政治的緊張を作り出したくないといった政策レベルの判断のために、日本企業を相手取った個人の裁判が取り消される。政府の経済・社会政策の一環として取られた「一人っ子政策」が子供を産む・産まないという個人の自由に法律を以て介入する。こうした人権観に立つ限り、個人の尊厳と権利に基づいて自由な生き方を認めようとする社会を展望することは難しい。

（斎藤　敏康）

中国の山旅（10）

西谷　仁

武隆カルストは世界遺産になっている中国南方カルストの一つである。中国のカルストは中国から東南アジアに延びて広く分布しており無数の鐘乳洞や浸食された山があり桂林や武隆だけでなくあらゆる所にすさまじいスケールの景観がある。鐘乳洞も高さ100m位のものがゴロゴロあり見あきる事はない。武隆にはカルストが地中深く浸食されて大きな空洞ができ天井が落下してできた大きな穴があり、天坑といわれている。又天井がこわれ深い溝が一直線に出きた一線地縫という地形もある。武隆の天坑はエレベーターで地底に降りる事が出き、そこから広い天井の開いた穴を歩き、続いて一線になった深い谷

を歩く。そこには映画のロケにもなった大きな住居があり、人が住むのに充分な大きさである。それを作った自然のいとなみに感動し、ワクワクした。武隆には張家界からバスで二日がかりで行ったが帰りは重慶にはバスで三時間でいけた。

第 14 回中国百科検定のお知らせ

試験日　2023 年 12 月 2 日(土)　京都会場は、京都府連事務所です。
試験時間　15：00～15：50（50 分）
受験級　初級、3 級、2 級、1 級、特級
受験申込受付期間　2023 年 9 月 1 日（金）～11 月 2 日（木）
お申込みは、京都府連または中国百科検定ホームページで

コロナ禍の台湾研究活動道中記（第 18 回）

自主待機期間（その2）高橋孝治

隔離ホテルから不動産契約代行業者と一緒に乗ったタクシーが、借りる家の候補地に着くと、そこには不動産屋の方が待っていました。そして、写真では「この家で問題ない」と了承していたものの、念のための家の最終確認です。その借りることになっていた家は、一間、トイレ・シャワー付きで、共用部分に洗濯機・乾燥機ありの学生用アパートでした。とりあえず、内部を確認して、居住するにしても、問題がなさそうであったため、家を借りる契約をそのまま確定することにしました。そして、隔離ホテルから一緒に来た不動産契約代行業者と不動産屋に現金で報酬を支払い、借りることにした家の契約書を受け取りました。

住むことになった家

しかし、問題なのは、インターネットの契約でした。外国で生活する上で、本国とメールなどを行う上で絶対に必要なものです。インターネットに関しては、家の価格に含まれているということでしたが、どうにも使い方が分かりません。そこで、このアパートで最もインターネットに詳しい住人がいるとのことで、不動産屋がその人を呼んでくれて、インターネットの接続方法や、インターネットのパスワードなどを教えてもらいました。なぜ、近所の住民に聞く?契約を取りついでいる不動産契約代行業者か不動産屋が対応するべきではないのか?という気もしますが、中華圏ではよくあることです。

こうして、やっと不動産契約代行会社と不動産屋も帰り、やっと本格的な台湾生活もはじまりです。一か月分相当の家賃と同額を不動産契約代行業者に取られましたが、希望の条件を伝えておけば、台湾で隔離ホテルから開放される日に、その条件に合致した家を探しておいてくれるのですから、まぁいいサービスであったでしょう。

よく考えると、これは「不動産契約代行会社」ではなく、「不動産探し代行業者」のような気もしますが、ちょうどこの家を貸しに出していた不動産屋が時間もあるので、念のため直接筆者が家を見てから契約するように手配してくれたそうです。（続く）

（2022 年台湾フェローシップ採択者／（元）台湾・淡江大学 日本政経研究所 訪問研究員（2022 年）／筆者出演のウェブラジオ
https://iq.pfrinet.me/archives/category/iq）

书呆子　（中国語で「本の虫」という意味）

「朝鮮戦争の正体」孫崎享著（元外務省国際情報局長、防衛大学教授）、祥伝社文庫、310P、2023年五月刊。

この戦争の正体は、なぜこれ程知られなかったのか？率直な感想です。同時に、この本を読了することは、WWⅡとこの戦争を経て、日本が劇的に憲法と離間させられ、又、米国自身が大きく戦争国家に変質したかが理解できます。その意味で、平和を願う関係者必読の本といえます。表の帯から…「この戦争で、米国は常時臨戦国に、日本は、民主主義軽視の国になりました。朝鮮戦争から七十年、その影響は今日も続いている。……日本という国がどういう国か、そして、今日の国際政治がどういうものか、それを理解するために、朝鮮戦争とは何だったのか、をいま改めて問う意義があると思います。」（「終わりに」より）

以下、要点に触れ、読みかけの本を横において、是非、この本を優先して読まれますように強く推薦いたします。

・この戦争の争点は、……一九四五年の解放後、38度線での公然たる戦争が続発し、正式に戦争が開始される以前、既に十万人以上の人命が失われていた。（内乱的要素が強かった）・日本の降伏以後、日本の総督府の呼びかけの下に、九月六日、「朝鮮人民共和国」が樹立されたのに、……米ソの思惑で潰された。・国際協調主義の米国ルーズベルトは、大国数カ国による朝鮮の「共同信託統治」であったが、「一国独占主義」のトルーマンに代わって、「分割」に変化した。・米国は、朝鮮の中に、反共の防波堤を築くこととなり、南朝鮮の民主化を目指す要素は全くなく、日本で始まる「逆コース」が米軍上陸後即刻実施された。・一九五〇年六月二七日、トルーマンは、海・空軍の韓国出撃（地上軍は三〇日）と第七艦隊の台湾海峡派遣を命令し、最も近い在日米軍が、韓国に上陸した。・国連安保理は、、五〇年六月二五日、ソ連欠席の下で、北朝鮮非難決議を採択し、七月七日、ソ連欠席の下で、国連軍の韓国派遣を決議した。・日本への影響：六月二六日、GHQは、日本共産党の機関紙「アカハタ」の発行停止を命令。七月二日、レッドパージ開始。報道機関では、朝日・毎日・読売・日経・東京・日本放送協会・時事・共同で326人が解雇された。・七月八日、GHQは、75000人の警察予備隊創設を命令。国会の議決なしに政令で創設。海上保安庁は、法律に反して極秘に掃海に従事。米軍と共に、46隻の船舶と1200人の旧海軍軍人が従事した。（22人が死亡）・最終的には、スターリンの死去を契機に休戦協定が締結された。

・米国にとっては、「忘れ去られた戦争」、「引き分けのための戦争」となり、この戦争を契機に、軍事大国の道を歩んだ。・NATOの軍事力増強、西側主要国全体の軍事費予算大増加の決定的要因となった。米軍は、兵力150万人から350万人に増強。国防予算は、1950年の150億ドルから500億ドルに増加した。自由主義陣営の基本的考えは、「全体主義的民主主義」になった。・米国は、占領当初の「非軍事化及び民主化」から、日本を去る時、（国権の最高機関を国会とする、全ての基本的人権を保障する、戦争を放棄する）の方向を逆転させ、冷戦の従属的パートナーとし始めた。北朝鮮は、「軍事的な敵対行為はとらない」を要求してきた。EU・ASEANのアプローチと南北の「平和条約」・「講和条約」の締結を強く望みたい。

（中本学）

中国語教室だより

４９期中国語教室は９月２日から後期の教室を開講し、zoomによるプライベートレッスンを含めて４０名あまりの受講生が熱心に学んでいます。後期からの新しい受講生も一人、二人ですが参加しています。

新しい試みとしてZoomによる「中国語を母語とする日本在住者のための日本語教室」を計画中です。講師は元西安翻訳学院日本語講師の郭梅先生、使用テキストは「みんなの日本語」初級１（スリーエーネットワーク）で、後期から２０回の開講を予定しています。

今年度は試行期間としてどの程度の需要があるかを探り、本格的には来年４月から正式に開講する予定です。お知り合いで受講を希望する方があればぜひご紹介ください。（橋本）